
神の使い

嬉遊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神の使い

【Nコード】

N5675C

【作者名】

嬉遊

【あらすじ】

俺は美少女のような美少年と旅をしていた。それは、“あるもの”を探す旅であり、この世界を救うための旅。だが俺達は変な奴等に追われ……。

【第1話】追う者追われる者

「少年が逃げたぞ！捕えろお！」

月明りの中を走りながら、相棒は隣りで冷静に言った。

「うわあ、もうばれちゃったよ」

「落ち着いてる場合かよ！？つーかあんなんじゃ、すぐにバレるに決まってるだろ！？」

俺達は今まで、牢屋に閉じ込められていた。

理由は、さっぱりわからない。

「隠してることを全部言わないと、ここからは出られない」……とかなんとか、おっさんは言っていたが、隠してることなんて無い。見知らぬおっさんに言う事なんて何一つ無いというのに。

だが勿論、閉じ込められて黙っている俺達じゃない。

相棒曰く、

「何かこの人達は頭悪そうだから、身代わり置いておけばバレないんじゃない？」

とのことだったので、とりあえず実行してみた。

牢屋のすぐ近くにいた看守2人を手刀で気絶させ、鍵を奪った。

その鍵で俺達は脱出。看守達は俺達の代わりに牢屋に入れておいた。

あとは排水口とかから逃げ出した訳だが……。

「いくら頭悪くても、あれだったら気付くだろう！もっとマシな脱出方はなかったのかよ！」

「そうやって人のせいにして……。自分は何にも考えてなかったくせに」

「う……」

これには返す言葉もない。

だが、ここで言い争っていても、仕方がない。

相棒と目を会わせ、同時に足を止めた。

「ぼく、あんまり人殺すの好きじゃないんだけどなあ……」
「別に殺さなくても良いって。動けないようにするだけで」
ここで追いつかれた。

約15人。……まあ、どうにかなる数だな。

「おとなしくしろ！そうすれば、君達を殺したりはしない」
だって、と相棒が目で言ってきた。

「……いや、だからって、おとなしくしてるワケにもいかないだろ？」

「うん……でもこの人達……ぼく達を殺す気なんて、もともと無いみたいだよ？」

「知るか、そんなの」

俺は人差し指を敵にむけ、術式を叫ぶように言った。

『大地の剣！』

敵の居る地面が、音をたてて割れていく。

「う、わっ！」

バランスを保てなくなり、
奴等は地面の底へと落ちて行きそうになる。

『水の盾』

隣りで冷静に、相棒が術式を唱えた。

刹那、ざわりと水が現れ、奴等を地割れしていない地面へと流していく。

俺はその間に高く跳躍し、奴等の真上に行った。
地面ギリギリまで迫り、更に術式を唱える。

『精神の門番』

15人が、同時にどさりと倒れた。
殺してはいない。ちよつと心の中を引っ掻き回しただけだ。

「よっ……」

とん、と地面に着地する。

後ろから、相棒の拍手が聞こえてきた。

「お見事」

「いや、お前がいなきゃ無理だったからな。俺達の実力だ」

そう言うのと相棒は、少女のように可愛らしく、にっこりと笑った。「ありがとう。でも、リスタがそんな風に言うなんて、珍しいね」

「そうかあ？ ルージスには普通に言ってると思ったけど……」

少女のような少年——俺の相棒の名はルージス・ライ・スティン。俺と一緒に旅をしている理由は“何か”を探しているらしい。その“何か”が何なのかは、俺も知らない。

そして俺——リスタ・ローカスも、あるモノを探している。

それは、“神の石”とも言われる、ラルティエシェインだ。

そのラルティエシェインは、膨大な力……一歩間違えば世界を滅ぼすほどの、恐ろしい力を持っている。俺の目的は、その石をこの世から消す事だ。

あれは、あってはならないモノだ。実際、俺にはそれを消すだけの力がある。

……俺達人間が使える、気術と呼ばれる力は、大きく分けて2つある。

1つは、コツを掴んでしまえば誰でも使えるようになる、通常気術。

……まあ、名前の通り、普通の気術だ。さっき使ったのだと、『大地の剣』と『水の盾』。

あとは『風の風車』、『炎の逆十字』、『癒しの救済者』の、合計5つだ。

ルージスは、この通常気術が物凄く強い。こいつより強い気術を使える奴を、俺は見た事がない。

そして俺は、通常気術はそんなに強くない。

……弱いとまでは言わないが、ルージスと比べたら、やっぱり弱い方に入るのかもしれない。

だが、その代わり……と言っちゃあ何だが、もう1つの気術、特殊気術こくしゅが使える。『精神の門番』がそうだ。

『時間の支配者』、『衛星の雫』、『恒星の砂』と、全部で4つ。中でも『衛星の雫』と『恒星の砂』を使える人は滅多に居ない。これは、普通の人には使えない、特殊な気術だ。生まれつき持った才能、としか言い様がない。4つ全て使える俺は、世界でも貴重な存在だ。

他にも、その家系の人しか使えないやつとか、訓練すれば使えるようになるやつとか色々あるけど、大体はこんな感じだ。

「……さて、また追いかけられるのも面倒だし、そろそろ逃げるか」
「待って、リスタ」

「何だよ」

ルージスは真顔で、地割れしている場所を指して言った。

「この地面、どうにかしないとマズイと思うんだけど……」

「………よろしく相棒！俺の方が気術使った回数多いじゃん？」

俺2回、ルージス1回。1回の差は大きい！

「……面倒だなあ……」

左手を地面に向ける。こいつは気術を使うとき、大抵左手で操る。

『大地の剣』

地面は音をたて、元通りになった。

「ちよつと失敗しちゃったな」

「そうか？綺麗だと思うけど……」

「最初より綺麗にしちゃった」

「………」

嫌味ともとれる発言。本人はそんなつもりは無いようだが……。

「お前は、俺とじゃないと相棒やってけないな」

「そう？」

「そうさ」

俺達はここから一番近い町に向かって走り始めた――。

【第2話】小さな宿にて

「良かったね。こんな夜中でも部屋貸してくれる宿があって……」
長い茶色の髪の毛をさらりとほらいながら、ルージスは言った。

……そう言えばこいつの髪、だいぶ伸びたよなあ。15歳の時から一緒に旅を始めて……もう1年になるから、伸びて当然か。

それに比べて俺の黒髪は、伸びるたびに切ってるから、大して変えない気がする。

「だな。もう追ってくる気配もないし……」

「ね。これで追ってきたら、本当に頭悪いよね。こっちには特殊気術使えるリスタが居るって教えてあげたんだから」

「俺、そーゆー意味でやったんじゃないんだけどな」

ルージスはそんなにやわらかくない寝台にごろりと転がった。

「うん、大丈夫、わかってるから。リスタはそんなに頭良くないもんね」

「おい、さすがにそこまで言われるとムカつくぞ……」

あはは、と可愛らしく笑う。そしてそんな笑顔を見ると、今言われたコトなんてどうでも良く思えてしまう自分が居る……。

「……なあ、ルージス」

「ん？」

俺は少し、その先の言葉を言うのをためらった。

今、訊いても良いコトなのだろうか。

「……お前が探してるモノって、何？」

「……………」

ルージスから笑顔が消えた。感情の読めない瞳でこちらを見ている。

再び、ふっと笑顔になった。

「……知りたい？」

「っーか……気になる」

ルージスは、ふふつと笑った。

「ぼくが探しているのは、本なんだ」

「……本？」

「そう、本」

「……そんなコト……言われても……」

「えーっと……それは……特別な本なのか？」

「そう。世界に……多分1つだけの本なんだ」

「……何の本？」

青い目を細めて、にこりと笑った。

「……さあ？」

「……」

あいかわらず、謎の多い奴だ。

話してくれないのは、ちよつと寂しいような気もするが、こいつにもこいつの都合があるのだろう。

そもそも、俺はこいつの何を知っているのだろうか。

こいつの身内のコトだって、よく知らない。養父に育てられてきたとか言っていたような気もするが、それだけだ。

本物の両親……それは話しづらいコトではあるだろうが……のコトとか、どういう家系だったのかとか、そんなことは一切話さない。なんか……自分のコトべらべら喋ってる俺が馬鹿みたいだ。

そんな俺の考えを見透かしたように、ルージスは笑って言った。

「そのうち……時がきたら。話せるようになったら、全てを話すよ。ぼくは、リスタの相棒だからね」

「……どうしたんだ？ 急に」

「何が？」

「いや……お前がそんなこと言うなんて珍しいなあと思って……」

「うん。というか、多分初めてだよ。ぼくがリスタにこんなこと言うの」

「おい……」

ま……こいつにしちゃあ進歩か。素直にありがたく受け止めてお

こう。

それにしても……。

「世界に1冊だけの本かあ……。もしかして、日記とか？」

「ううん、そんなんじゃないよ。代々伝わる本？って言えばいいのかな」

「……ステイン家に伝わるってことか？」

「まあそんなところ」

「曖昧だなあ……」

あはは、と笑うルージス。……俺にしてみれば、笑い事じゃないんだけどな……。

本の事は管轄外すぎてさっぱりわからないが、一時、珍しく読書に没頭したことがあった。

それは、ラルティエシェインの事が記してある本だ。

最初に興味を持ったのは、確か10歳くらいの時。両親が他界してから初めての仕事先に聞かされた。

神の石は計り知れない力を持っていること。誰もがその石を手に入れようとしていること。

でも、その仕事先のオヤジは、その石がなくなってしまうえば良いと思っていた。

石のせいで、争いが始まってしまいうからだと、オヤジは言った。

俺はその後すぐ、ラルティエシェインについて調べ始めた。

ラルティエシェインは、ラルティア家という家系で、代々管理しているらしい。だか、そのラルティア家は、ちょうどその年に謎の襲撃事件に遭い、1人残らず殺されてしまっている。

その時から、ラルティエシェインも行方不明になっている。

そして、俺がラルティエシェインを消そうと決めたのは、ある書物がきっかけだった。その書物には、ラルティエシェインの消し方が載っていた。

それは、特殊気術である『^{つぎ}衛星の雫』を使うというものだった。『^{つぎ}衛星の雫』は、気術を無効にする力がある。その力で、ラルティ

エシェインの力を無効にするらしい。

始めは、本当にこんなんで消せるのかとも思ったが、これが一番有力だった。

……『衛星の雫』を使える人なんて滅多にいない。だから、俺が、この神の石を消さなければならぬ。

「……ま、それもラルティエシェインが見つければの話だけどな………って、ルージス？」

隣りの寝台を見ると、ルージスが目を閉じていた。微かに寝息も聞こえるし、寝ているのだろう。

……仕方ないか。もういつの間にか日付も変わっているし。俺もそろそろ眠いし。

「色々考えるのは、明日でいいかあ……」
瞼をおろすと、すぐに眠りにつくことが出来た――。

「リスタっ、リスタ起きてっ。大変、大変だよっ」

ルージスの声がする。体をゆっさゆっさと揺さぶられ、頬をぺしぺし叩いてくる。

「何だよ朝っぱらからあっ！そう何度も叩くな！」

「何言ってるのリスタっ。朝っぱらって、もうお昼の1時だよっ」

「……何？」

確かに、部屋は蠟燭も灯してないのに明るい。窓の外には青空が広がっている。

「うわ……寝過ぎだな……」

「それどころじゃないんだよ。大変なんだっ」

そういえば、さっきから大変大変って連呼してるな。

「昨日ばく達を追ってきた連中が、また来たんだっ。今食堂に居て……」

「馬鹿！それを先に言え！！」

俺は部屋から飛び出て、食堂に降りていった。

「貴様らっ！何しに来やがった!？」

相手の姿を確認するなり叫んだ。

……今回は、20人ってとこかな。

「君達を待っていた。さあ、この関係のない人達にまで危害を加えなくなったら、私達についてくるんだ」

相手は満足げに笑った。ついていくなんて、一言も言ってないのに。

「はっ、誰がお前等なんかに……」

ついていくもんか、と言おうとしたが、肩をつかまれて言えなかった。

その肩をつかんだ本人……ルージスは冷静に、小声で言った。

「怪我人が出てる。下手に行動するのはマズいよ」

確かに、1人うずくまってる人がいる。確か、ここの店の奥さんだ。

「くそ……っ、じゃあどうするって言うんだよ」

「ぼくが囿になる」

「はあ!？お前何言って……」

ルージスはしーっ、と人差し指を唇にあてた。

「声大きいよ。いい?ぼくは気づかれないように、お店の外にでる。多分、奴らの半分以上はぼくを追ってくると思うけど、あとはここに残ると思う。そうしたら、『精神の門番』で、1人残らずぼくを追わせるように操って。20人全員がここから居なくなったら、怪我人の治療してあげて」

「お前……1人で奴らの相手するつもりかよ!？」

「うん。ぼくは強いからね。大丈夫」

さらりと言いやがった。いや、確かに強いが……こうもケロリと

言われると、ちょっと腹が立つ。

「ぼくが出るまでは、テキストに演説でもしててよ」

「えん……俺にそんな高度な技が出来ると思ってんのか!？」

「思わないけど。奴らの目をひきつけておけば良いよ。じゃ、よろしく」

「うおい!？」

ルージスがそろそろと動き始めた。

やばい。あいつらの目がルージスの方に行く前に、俺に注目を集めなければ……!

「えーっと……はいっ、ちゅーもおく!」

とりあえず大声を出してみた。

こんなんじゃあ全員は注目しないだろうなあ、と思っていたが、意外にも、20人全員の目がこちらに向けられた。しかも、移動しているルージスに気付く様子はない。

こいつらは……馬鹿の集団なのか?

「えっと……。に、人間とは! 決して1人では生きていけないものなのであります!」

変なコトを口走ってしまった。……この先、何を言えば良いんだ?

「つ、つまりー、生きていると、色んな生物が犠牲になったりー、人間は皆助け合いながら生きていてー、ここに居る全ての人達も仲間でありー……」

何が言いたいんだ俺!? 奴等は敵であって仲間ではないはずだ!

「よ、要するに! 人間とは、決して1人では生きていけないものなのです!」

……ふりだしに戻る。

20人全員、更にはこの店の人やお客さんの頭の上にまで、はてなマークが浮かんでいる。

俺も馬鹿のうちの1人だったのか……!

「えっと、だからー……」

「少年が1人逃げたぞ!」

今、やっと気付いたらしい。ルージス、ナイスタイミング！

ほぼ全速力で走るルージスを、12人ほどが同じように全速力で追いかけていく。

残った8人は、俺を捕えようと飛び掛かってくる。

「おとなしくしろ！」

適当な距離になったところで、ルージスに言われた通り術式を唱えた。

『精神の門番！』

ぴたりと奴等は動かなくなった。

「まわれーえ、右っ！」

くると半回転し、そのままルージスを追いかけていく。

……よし、あとは怪我人か。

「大丈夫か！？」

店のオバサンのところに駆け寄る。

左腕を切られているが、そんなに深い傷じゃない。

「ああ……大丈夫だよ。それにしても驚いたねえ。『精神の門番』
を使えるなんて……」

「大したことじゃねえよ。じゃ、治すからじっとしてろよ」

傷口に手をかざす。

『癒しの救済者』

傷口が光に包まれ、塞がっていった。

「悪いねえ」

「気にすんな」

やがて、食堂に居た客が部屋に戻っていった。

それでも俺は、食堂で相棒を待っていた。

だが、この日のうちにルージスが戻ることはなかった――。

【第3話】神の石の聖騎士団

午前3時。

「……………」

時計の秒針が動く音と、風が時々窓を叩く音と、俺が貧乏揺すりする音しか聞こえない。

ルージスは、まだ帰って来なかった。

「はあ……………」

俺は何度目かわからないため息を吐いた。

この食堂は、エントランスを入ってすぐのところにある。泊まっている旅人の食事は勿論ここで出すし、常連が来たりして情報交換をするらしい。

……………が、流石にこの時間だと、客は居ない。俺1人だ。

「はいよ」

店のオバサンが紅茶をがちやりと置いた。

「あ……………ども」

とても香ばしい。今は一番落ち着く香りだ。

「あんまり無理すると、あんたが体を壊すよ？」

オバサンは心配そうに言ってきた。

「だからって……………寝るわけにもいかないだろ？」

「そうだけど……………」

黙り込む。

確かに、俺が起きていても仕方ないと思う。俺は何もしてないんだし。

でも、こんな時に眠れるわけもないし……………。

「あんたの連れ、無事だといいねえ……………」

「……………」

死ぬことはないと思うけど……………かすり傷くらいはしてるかもしれないな……………。

紅茶を一口飲む。

「……あ、うまい」

「だろ？アタシが入れた紅茶は、この辺りのどこの店より美味しいんだよ」

「どっからくるんだ？その自信は」

「事実を言っているだけさ」

ちりん、と扉が開く音が聞こえた。

「ルージス!？」

エントランスを見た。特に根拠はないが、何となく、そう思ったから。

そこに居たのは、やはりルージスだった。だが顔が……血塗れ。しかも笑顔。

「……ルー……?」

「あれ？起きて待っててくれたの？先寝てても良かったのに」
平然と言っているが、本当に顔は血塗れだ。額からどくどく流れている。

オバサンがルージスに手ぬぐいをわたした。それを血塗れの笑顔で受け取りながら、イスに座る。

「あ、ありがとうございます。まさか帰りがこんなに遅くなるなんて、思ってもみなかったよ。今何時？」

手ぬぐいで血を拭きながら問う。

なんだろう……この脱力感。

「今は午前3時だけ……。お前、何でこんな怪我して、何でこんな時間まで戻ってこなかったのか、説明してみろ」

ルージスは小さく首を傾げながら言った。

「そんな大したことじゃないんだけど……。まず『風の風車』で竜巻作って、その中に奴等を入れて、笑いながら見てたんだ。そうしたら、気付いたら奴等の鞘が額に当たって……」

「充分大したことだろ！しかも笑いながらって何だよ!? つーか防御するなりよけるなりしろよ!! もう突っ込み所多すぎて突っ込み

きれねえよ!!」

「あはは。本当に多いね」

「自分で言うな!!」

なんで俺はあんなに心配して待っていたのだろう……。

「ったく……。もっと詳しい話は後でちゃんと聴くから、とりあえず額の治療させろ」

「あ、はい」

ルージスは素直に額を出してきた。

俺は患部に手をかざし、術式を唱えた。

『癒しの救済者』

傷口が塞がっていく。そんなに深くなかったから、すぐに元通りになった。

「ありがとう。……ごめんね、心配かけて」

珍しく素直に謝ってきた。俺が怒ってるのかと思ったのかもな……。

「そう思うんなら、次からは無理すんな」

「無理はしてないんだけどさ……」

……まあ、竜巻を見ながら笑ってたっていうくらいだから、むしろ楽しんでたのだろう。

「本っ当、お前って、よくわかんない奴だよ……。まあ、とりあえずそれはいいとして、何があったか、もっと詳しく話してもらおうか」

「うん、別にいいけど……」

可愛らしく目をこすって、ルージスは言った。

「ぼく、その前に寝たいなあ……」

「……………」

大きなため息を吐いて、がつくりと肩を落とす。

いや……。確かに眠いけど。もうすぐ朝になっちゃうけど。

「……じゃあ、朝になったら、何が何でも話してもらおうかな」

午後、2時。

「あー……さすがに寝過ぎたな……」

物凄くかつたるい。食堂に降りて来るまでが激しく面倒だった。

「ぼく、何か寝違えちゃったかも……。首痛い……」

食堂には、ほとんど人が居なかった。だから、昨日の話をするのは好都合だ。

ちなみに、今日の昼ご飯(?)は玉葱のスープとツナのサラダ、そしてトースト。

「朝ご飯的なメニューだね」

「俺達にとっちゃあ朝ご飯だからな」

俺達はとりあえず、片っ端から料理を片付けていった。

ルージスにいたっては、追加でパンケーキと、デザートチーズケーキまで頼んだ。

寝起きのくせに、よくそんなに食うよな……。

「あ、そういえば昨日の話だけど」

チーズケーキを口に運びながら、ルージスが言った。

……てか、“そういえば”かよ。

「何?」

「何か……ラルティエシェインがドコにあるのか教えろ!的な事を言ってたよ」

「ラルティエシェイン……?」

何故それを俺達に訊く。むしろこっちが教えてもらいたい。

「で?」

「うーんと……神の石は、我等、神の石の聖騎士団ラルティエシェインが持つべきだ? 使うべきだ? だったかな。そんな感じの事を言ってた」

「神の石の聖騎士団?」

なんなんだ、そのわけのわからない団体は。

恐らく、裏で活動しているのだろうが。

「でも……騎士団って感じじゃなかったよな」

「うん。だから騎士団っていうのは、本当にただの名前みたい。正式な組織じゃないみたいだし」

あんな危なっかしい、わけのわからない組織が、正式に存在するわけがない。……してたら、世も末だ。

「でも……そんなに強かったのか？お前がてこずったくらいだから……」

ルージスはチーズケーキの最後の一切れを口に入れて、横に首を振った。

「ううん、そんなことなかった。ぼくは、てこずってなんかいないしね」

「はあ？じゃあなんであんな遅くに帰ってきたんだよ」

「だってぼく、怪我してたでしょ？」

もうすでに綺麗に治っている額を指しながら言った。

「血が凄かったから、まだ明るいうちに町を歩くのはマズいかなって思ったの」

「……町で戦ってたんじゃないのかよ」

ルージスは眉をひそめ、わざとらしく怒ったような表情をつくった。

「やだなあ、いくらぼくだって、町中で殺り合ったりはしないよ。」

関係ない人巻き込むわけにはいかないでしょ？」

「……なら、ドコまで行ったんだ！？」

「木がいっぱいはえてるトコ。森かな？」

森……。この近くにはなかったハズだが……。

マジでどこまで行ったんだろう。

「でー、眠かったら、しばらく寝てたの。そうしたら、すでに周りは真っ暗で……」

淡々と話しているが、普通はなかなか、こんなコト出来ないと思う。寝るどころじゃない。

「……まあ、簡単に言うと、聖騎士団は弱かった、と」

「うん、まあそんなところ」

まあ確かに、弱そうな感じがしたし、頭の方も悪そうだったからな……。

それより気になるのは聖騎士団の言動だ。

「どうして……俺達がラルティエシェインのコトを知ってると思っただんだ？」

アップルティーをこくりと飲んでから、相棒は言った。

「わからない。もう1つ、聞いたことの無い団体名が出てきたような気もするんだけど……聞き取れなかったんだ」

「……なんなんだ？ いったい……」

わざわざ俺達を閉じ込めたり、襲ってきたり、やることが普通じゃない。

それに、標的の方もハッキリしない。

俺なのか、ルージスなのか、それとも両方なのか……。

ルージスは急に立ち上がった。

「まあ何にせよ、出来るだけ早くここを出たほうが良いっていうのは確かだよな」

「……そうだな」

すぐに俺も立ち上がる。……心なしか、さっきよりだるくなくなったような気がする。

その後は、自分の部屋へ戻り、荷物をまとめ、宿をでた。

店のオバサンが心配そうにしていたが、止めるようなことはしなかった。

ちりん、とドアを開ける。

「なかなか良い人だったね。宿のおばさん」

「……だな。もっとゆっくり出来たら良かったのにな」

「落ち着いたら、また来ようか」

「ああ」

胸中で礼を言いながら、

俺達は宿に背を向けた――。

【第4話】リヴィア家の兄妹

「なんか……日が暮れてきてるよな……」

オレンジに染まりかかっている空を見上げて呟く。

「ぼく、野宿だけは嫌だなあ……」

俺の相棒、ルージスは言った。

「俺だって嫌だよ」

そりゃあ真冬よりはマシだけど。

俺達が持っている地図によれば、次の町まではそんなに距離がないハズだった。

すぐに着くだろうと思っていたのだが……。

「全然着かねえじゃん」

この地図が間違っていたのか、あまりにも古すぎるのか……。恐らく前者だな。

「どこか泊まるトコロとか無いのかな？」

「どう見たってそんなトコロ……」

ないじゃん、と言うハズだったのだが、口を閉ざさざるを得なかった。

この道の先に、小さな家らしきモノがある。

「あそこ、人いるんじゃない？」

「あ、本当だ。行ってみよっか」

自然と足が速くなる。

絶対野宿なんてするか！という強い思いが、疲れた足を動かすのだ。

ラルティエシエン

……最近、神の石の聖騎士団とかいう団体に追われ、肉体的にも精神的にも疲れていた。勿論、睡眠とかはちゃんととっているが、どうも疲れが取れた気がしない。

「ここは……なんかのお店なのかな？」

茶色いドアの前で、ルージスが呟いた。

そのドアには、『ギニョール』と書かれている看板が掛けてある。

「表札……じゃないよな」

「多分、お店の名前だよな」

指人形のお店だろうか。

とりあえず、ノックしてみる。

「ごめーんくださーい」

しばらく返事はなかった。微かに灯が見えるから、誰か居るハズだが……。

「留守か？」

だとしたら不用心だな。灯つけっぱなしだなんて。

こりゃあ本格的に野宿だな、と思い始めたところで、小さくドア
ーが開いた。

「……………」

顔を出したのは、小さな女の子だった。

クセのある金髪に飴色の瞳。4、5歳くらいだろうか。

その女の子が、じっとこちらを見つめてくる。

「あつとー、お兄ちゃん達をちよつとここに泊めてもらえないかな
ー？」

自分のことをお兄ちゃんと言うなんて……自分でも気色が悪い。
女の子も同じ様な事を思ったのか、二つに結った金髪をふわりと
舞わせ、家の中へ入っていった。

「ほらー、リスタが変なコト言うからー」

「俺のせいだよ！？ 子供は苦手なんだって！^{ガキ}」

必死で訴えるが、ルージスは相変わらず責めるような目で見てく
る。

「リスタのせいで、今日は野宿かも……」

「うわ……それだけは勘弁……」

ちようどその時、今度は男が出てきた。

さっきの女の子と同じ様な金髪に、同じ様な飴色の瞳。

口元はにやにやと笑っている。

そしてそいつは、ルージスを見ながら、

「悪いけど、男連れはお断りしてるんだよねー」

「……は？」

男連れ……って、普通女に言うもんじゃないか？

「君1人だったら泊めても良いよ。……なんてな」

……多分、ルージスを女だと思ってるな。まあ、見てくれは女にしか見えないけど……。

当の本人は特に気を害したりもせず、にっこりと笑って言った。

「ぼくも男だけど……。泊まらせてくれるんですか？」

これを聞いた男の顔は見物だった。

瞳が見開かれる。

「うっそお……それで男？マジ？」

「随分失礼な事を言うね。なんなら脱ごうか？」

こいつ、本気で言ってるな。

男が笑った。

「いや……流石に男の裸は見たくねえよ。いいよ、今日は泊めてやる。入るな」

良かったね、と目で言ってくるルージス。お前は本当にそれで良かったのか……？

家の中は、予想に反して植物が沢山置いてあった。てっきり指人形が置いてあるのかと思ったのだが……。

「指人形のお店じゃなかったね」

ルージスも同じことを考えていたらしい。

「ツイア！4人分の食事を出してくれー」

台所らしきところに、それだけ叫ぶと、男は俺達を席に着かせてから言った。

「まだ名前言ってなかったよな。俺はツエルノ・リヴィア。18だ」俺らより2つ上か。

「あー、俺はリスタ・ローカス。16歳」

「ぼくはルージス・ライ・ステイン。リスタと同じ年で、男です」にっこりと笑うのが、また恐ろしい。

「そういえば、さっきの女の子は？」

ルージスが問うた。あの、最初に出てきたコのことだろう。

「ああ、あいつはツイア・リヴィア。俺の妹。5歳だったかな」確かに、そう言われてみると、似ている。

ぴよんぴよん跳ねた金髪とか、顔立ちとか。

「5歳で食事の準備なんて、大変だな。剣術ならとっくに出来る年だけど」

そんな俺の言葉に、ツエルノは呆れたように笑った。

「お前、それじゃあ順番が逆だ。まず身の周りの事を出来るようにならなきゃなんねえ」

「身を守るのが先じゃないか？」

ここで、ルージスがぼそりと、

「バレないように人を殺す方法を習うのが先じゃないかなあ」

いや……それは違うだろう。

ツエルノも同じようなコトを思ったらしい。

「それこそ順番が違うだろ。……つか何？ バレないように殺れんの？」

「多分ね。昔はよくやってたから、まだ出来るんじゃないかな」

今、さらりと爆弾発言しやがった。というか、一体何のためにそんなことを！？

……何のためにそんなことを、と言えば。

「ツエルノ、お前、何やってんだ？」

「ん？」

さっきからツエルノは、ルージスの肩に腕を回している。そして茶色い髪を、くるくるといじったりも。

「ツエルノって、そーゆー趣味なのか!？」

本人は気分を害することもなく、思いつき吹き出した。

「ちげーよ! 流石の俺でも、それはねえって! たださあ、こいつ、すっげえ美人じゃん? だから男でも問題ねえだろ」

「あるだろ!」

肩に腕を置かれたまま、ルージスはくすくすと笑った。

確かに、美人だが……。

「お前も嫌がれよな! 流されてても良いのかよ!？」

「うん、別に嫌じゃないしね」

「おい!」

こいつらと居ると、何だか俺が変な様な気がしてくる。……実際、変なのだろうか。

ちようどそこへ、パンを持ってツイアがやってきた。いきなり来た客に馴々しくしている兄を見ても、何とも思わないらしい。

「ツイア、手伝おうか?」

客人だからって、何もしないのもどうかと思ったので、きいてみた。

ツイアは飴色の瞳を伏せる。

「いいの。おきやくさんには、手伝ってもらっちゃいけないの。だから、ツイア1人でやる」

早口でそれだけ言うと、走って台所へ戻っていった。

緊張、してるのかもな。

「あー、悪い、あいつ人見知りするんだよ。すぐ慣れると思うけど」

「兄のツエルノおまえとは、大違いみたいだな」

こいつみたいな性格の方が、へらへらと生きる事ができて良いかもしれない。

……そういえば、この2人には両親が居ないのだろうか。さつきから話すら出ないし。

だからツエルノはあんな性格で、ツイアはあーゆー性格なのかも。

「……………」

俺は少し悩んでから、立ち上がった。

「ツィア！やっぱ俺も手伝うよ！」

同情ではない。何となく、他人事のような気がしなかったからだ。

「これ持ってけばいいんだよな。お、美味そうじゃん」

「だめっ！ツィア1人でやるの！」

必死で止めさせようとしているツィアを無視して、テーブルに運んでいく。

こうして、

俺達の長い夜が始まったのだ――。

【第5話】聖騎士団長の謎

「リスタお兄ちゃんとルージスお姉ちゃんは、こいびとどうしなの？」

ツエルノが思いっきり紅茶を吹き出した。

もうすでに、食事も終わり、みんな喋っていた時に、ツィアの言葉。

ツエルノが吹き出さなきゃ、俺が吹き出していたかもしれない。

「うおっ！？汚なっ！」

「わ……わり……」

腹を抱えて、必死で笑いを堪えている。

自分の妹が言った言葉なんだから、責任持って下さい。

「ツィアちゃん……ぼくは男なんだけど……」

あっさり人見知り期間が終了したツィアは、目をぱくりさせた。

「おとこ……」

やっぱり、信じられないのだろうか。

「そうだよ。だから、恋人にはなれないんだよ」

にっこりと笑って言うルージス。でも目は笑っていない。

それでも何かに納得出来ないらしいツィアは、身を乗り出して反論した。

「でもっ！おとこどうしでも、こいびとどうしになれるって言うてたよっ！」

「……誰が？」

「ツエルノお兄ちゃん」

ルージスの瞳がゆっくりツエルノの方へ向けられる。

「いや！別に怒ることじゃないじゃん！？」

「別に怒ってないよ。ただ、そんなこと教える暇があれば、自分の身を守る術を教えた方がいいんじゃないかなあって思っただけ」
どう見ても怒っているのだから……まあこいつらは放っておこう。

「ここは……植物かなんかの店なのか？」

きょとんと2人を眺めていたツィアに問うてみた。

俺の方を見るなり、嬉しそうに頷く。

「うんっ！ハーブとか、いろんなのおいてるんだよ！お父さんのお父さんのお父さんが始めたお店なんだって！ツィアのおうちはね、植物の気術がとくいでね、『植物家の指人形』^{リヴィア}っていうのが使えるんだよっ！」

……これがマシンガントークというやつなのか。大人しそうという第一印象とは逆で、べらべら喋る。

「じゃあ、ツィアも使えるのか？」

「うん、まだちょっとしか使えないけど……。でもね！『植物家の指人形』はツィアやツェルノお兄ちゃんみたいにちゃんとしたりヴィアじゃなきゃ使えないから、いっぱい練習して、もっと使えるようになるんだっ！」

おそらくこのコは、自分がリヴィアであることに誇りを持っているのだろう。

……俺にはよく解らない感覚だけど。

関係ないが、店の名前の『ギニョール』はこの術式の指人形^{ギニョール}からとったものだろう。

ツィアが大きなあくびをした。

「あー……そろそろ就寝時間か？」

「ううん、まだー。お兄ちゃんたちと、いっぱいしゃべるのー」

そんなことを言っているが、目がとろんとしている。すぐにでも寝てしまいそうだ。

「ツィア、そろそろ寝ろ。話すのは、明日で良いだろ？」

ツェルノが優しく言うが、ツィアは首を振った。

「あしたになったら、いなくなっちゃうもおん……」

「居なくなんねえから。さっさと寝ろ」

ツィアを部屋まで連れていき、ツェルノは再びイスに座った。

「ぼく達、多分明日には出て行くと思うけど……」

「嘘も方便ってな。ああ言わなきゃ、寝なかっただろ」

確かにそうだけど……何かツイアに悪いような気がするな。

「気にすんなって。どうせ朝飯は食ってくんだろ？なら良いじゃねえか」

「まあな……」

虚空を見つめる。何となく、明日出て行くのが寂しいような気がした。

ルージスの方に視線をやると、ルージスは急に目を細めた。

「ルージス？」

「約30人だ」

それを聞き、俺はツエルノと同時にドアの方を見た。

「まさか……あれか？あの……」

「聖騎士団。多分それだ。……随分人数が多いみたいだけど」

一昨日、昨日、今日。3日間連続で来やがって……一体なんなんだ。随分暇人だな。

ルージスが立ち上がる。

「ま……今回も雑魚ばっかみたいだし、気軽に片付けよっか」

「だな」

とりあえず外に出ようとドアノブに手をかけた。そこでルージスが。

「ツエルノはツイアちゃんのこと、見ててよ」

長剣を持ちながら、ツエルノは固まった。

「え……加勢しちゃだめ？」

「だめ。ツイアちゃんに何かあったら、一生後悔するよ」

真っ黒な笑みでそれだけ言うのと、ドアを開け、外に出た。

「今回は……何の用ですか？」

口元にだけ微笑みを浮かべ、ゆっくりと言った。

……マジギレする寸前……？

聖騎士団の男が1人叫んだ。

「我々と一緒に来てもらう！来ないと言うならば、力づくで連れて

いく!」

「やれるもんならやってみれば?」

ルージスが即座に答えた。青い瞳は冷たく光っている。

珍しく、本気で怒ってる。

後ろから、肩を叩かれた。

「……あれ? お前、ツイアはどうした?」

「さすがにこの騒ぎで起きたみたいだったけど、睡眠薬で寝かせてきた」

「……そこまでのするほどのコトじゃないと思うけど……」。

「な、だから、加勢していいだろ?」

嬉しそうに笑いながら言う。……何がそんなに楽しいんだか……。

「まあ、いいけど、別に。怪我だけはすんなよ」

「りょーかーいっ!」

ツエルノの返事を合図にしたように、隣りでルージスが術式を唱えた。

『水の盾!』

ざわりと水が現れ、奴等の足元をすくう。

バランスを崩した1人の男が苦し紛れに叫ぶ。

『風の風車!』

細かな風がルージスの水を分散させた。

そこで更にルージスは術式を唱える。

『炎の……』

「待った!」

ぱしん、と音が聞こえ、術式が中断された。

ツエルノがルージスの手……気術を操る左手を、叩くように掴んだ音だった。

「……何で止めるの?」

「いや……殺るのは、もうちょっと後にしてくんねえ?」

「別に殺る気はないけど……」

「だから、手えだすのを、もうちょっと待ってもらえねえか?」

普段では想像できないくらい、真剣な表情だった。

それを見て、ルージスは小さくため息を吐いて、左手をおろした。

「……いいよ。そのかわり、さっさと片付けてよ」

「わかつてる」

一歩前に出、飴色の瞳を奴等に向ける。

それは、恐ろしいくらい、感情を殺して……。

「あんたらの団長は？」

静かに、そう言った。

最初は何を言っているのか、理解出来なかった。それは、奴等も同じようで、しばらくたってから、やっと返事が返ってきた。

「お前達に答える必要はない！」

「いるんだろ？そこに。あんたらが今、必死にバレないように隠そうとしている人は、団長……だろ？」

「……！」

ぴくりと眉が動いた。

なるほど、言われてみれば、誰かを隠しているような感じがする。

「……そんなことは……！」

「いい。下がれ」

透き通った男の声が響いた。それは前線で闘おうとしている奴等の後ろから発せられたものだ。

奴等が道を開ける。

歩いてきたのは、茶髪に飴色の瞳を持ったおっさん。

一昨日、俺達を監禁した張本人だ。

「どうやら俺は、君達をなめていたようだな。今、ハッキリとそれがわかった」

いや、気付くのおそいだろ。はじめの時点で気付いてもらいたかった。

ツエルノが呆れたように笑って言う。

「はっ、随分腐っちゃったようだな」

「それは俺の台詞だ。我々は、この世のためを思ってやっている」

「それが、間違いだとしても？」

「間違いではないからな」

……聞いていると、随分親しい感じがする。知り合い……とかか？
というか……なんだろう、この2人の雰囲気の違いは。

「そう言い切るなら……遠慮はしなくて良いってことだよな？」

ツエルノはそれだけ言うと、右手の人差し指をおっさんに向け、
術式を唱えた。

『^{リヴィア}植物家の指人形！』

言い終わると同時に蔓のような草……？がわさわさ生えてきた。
それは足から順に、おっさんに絡み付いていく。

『風の風車』

おっさんの鋭い風で、草は音をたてて切れていく。

今の気術を見て思ったが、このおっさんは……予想以上に強いかもしれない。

そして、少し手加減しているように見えた、ツエルノも。

「それで終わりか？」

おっさんはやりと笑った。……どこかで見た事のあるような笑み。

……どこだっけ？

そんなことを考えている間に、おっさんは信じられない術式を唱えた。

『^{リヴィア}植物家の指人形』

「な……！？」

微かに反応が遅れた。草達は、さっきのツエルノの気術とは比べ物にならないくらい早く、俺とルージスに巻き付いた。

『炎の逆十字！』

ルージスと綺麗にハマった。小さな炎で草を焼き切っていく。

「どういこと……？」

ルージスが呟いた。

わけがわからない。『^{リヴィア}植物家の指人形』は、リヴィア家の人でな

いと使えないハズだ。

それなのに、何故、このおっさんが……？

「下がれルージス！お前は手え出すな！」

「はあ！？」

ツエルノの叫び声に、ルージスが珍しく素頓狂な声をだす。

だか、ツエルノの瞳は真剣そのものだった。

「これは、俺の問題だ」

「何言ってるの。ぼく達の問題だよ！？」

これに関してはルージスの言い分の方が正しいと思う。実際、俺にも関係あることだし。

「わかってる。けど、それ以上に俺の方が関係あるんだ。だから、ここは俺に任せてくれねえか？」

「……………」

ルージスと目を合わせる。

よくわからないが、ツエルノも本気らしいし、任せても良いのではないかと思う。

「……わかつ……………」

「やめて！！」

少女の高い声が響いた。

ツィアは、目に涙をためて、おっさんの顔を見ていた。

「ツィア！お前なんで起きて……………！」

ツエルノの言葉なんて、聞こえていないようだった。

そして小さな手をかたくにぎりしめ、叫んだ。

「おねがい！やめて、お父さんっ！！」

【第6話】植物使いの争い

「やめてよお父さん！もうだれかがきずつくのなんて、みたくないよおっ！」

必死で叫ぶツィア。それを唾然として見るツエルノ。

「ツィア……お前、わかつ……」

「わかるよ！ツィアのお父さんだもん！」

誰も言葉を発しなかった。というか、発せられなかった。

この聖騎士団長のおっさんが、ツエルノとツィアの父親……？

「どういうことだよ……」

呟く。誰も聞いていないのはわかっていたが。

「ツィア……睡眠薬飲ませたのに……」

「のんでないすいみんやくが、きくわけないよ」

「そりゃあ……そうだけど……」

何故飲んだフリなんてしたのか。そう言いたげな表情だった。

……最近のコはませてるなあ……。

「ツエルノ、どういうコト？」

ルージスが鋭い目付きで言う。

睡眠薬の方……ではなく、父親のことを訊いているのだろう。

「……どうもこうもねえよ。これが事実だ。こいつが、俺達の親父だ」

「だから、関係あるって言ったの？」

「ああ。俺が止めなきゃならねえだろ」

この聖騎士団が何をしているのかは知らない。だけど、俺達を監禁したりしたところからして、まともな連中じゃない。

その過ちを、息子であるツエルノが止めなければならぬと言う。ならば、俺達が手を出すわけにはいかない。

「じゃあ……さっさと決着つけろよ。俺達が手えだしちゃいけない

「んだろ？」

ツエルノと目が会う。俺が少し微笑んでやると、ツエルノもにっこりと笑った。

「……そっか。さっきの聖騎士団長の笑みは、こいつに似てたんだ。「わりいな。でも、俺が負けそうになったら、助けてくれても良いぜ？」」

「いや、それは都合良過ぎだろ」

冗談っぽく言ったが、本当に、助けてやるつもりはない。

それが真剣勝負というものだし、それに手を出すわけにはいいかな。

「……俺がもし……もしだぞ？もし死んだら、ツィアのこと頼むな」「もして言い過ぎだ。つーか、死ぬなよ、普通に」
「多分死なねえ。あと、最後の頼み。ツィアを眠らせるか気絶させるかしてくれねえか？」

「……何で」

「親父が負けるところなんて、見せるわけにはいかないじゃん？」
「……………わかった」

頷くしかなかった。父親が負けるにしても、兄が負けるにしても、出来る事なら見せたくない。

俺はツィアの手首を掴んだ。

『精神の門番』

かくん、と膝を折り、ツィアは気絶した。それを抱き抱え、安全そうなところへ移動させる。

「へえ……『精神の門番』なんて使えんのか」

「いいからさっさとやれって」

笑みを消して、ツエルノは父親の方を見た。

小さくため息を吐いてから、ゆっくり切り出した。

「俺は、正直言ってお前を殺したくない。……一応、父親だからな。だから、こういうのはどうだ？どちらかが気絶するまでやる。殺してはならない。……もし、俺が先に気絶したら、この2人……リス

タとルージスをお前にやる。好きにしてい。お前が負けたら、俺が聖騎士団の団長になる。……どうだ？」

「ちよつと……勝手に変な条件持ち出さないでよ」

ルージスの反論も空しく、おっさんはあつさり頷いた。

「いいだろう」

「ちよつと!？」

……こうなってしまうては、ツエルノが勝つのを祈るしかない。

……いや、だけど……。

「気絶させるより、殺す方が簡単じゃないか？」

俺みたいに『精神の門番』^{こころ}が使えるなら別だが、通常気術で気絶させるというのは難しい。

「普通はな。でも俺みたいに強い気術を使えば、『癒しの救済者』で気絶させることが出来るんだ。必要以上の癒しは癒しでなくなるからな」

……初耳。ルージスに確認するようにそちらを見ると、頷いた。

「ぼくほどじゃなくても、ある程度強くないとね」

「……何で今まで使わなかったんだ？」

「だって疲れるもん」

さらりと言いやがった。俺だって疲れるんだがな……。

「じゃ、そろそろ始めてもいいかい？」

ツエルノが言った。

「あ、はい。邪魔してすんません……」

更に邪魔しては悪いので、後ろに下がる。

「……手加減はしないぜ」

「当然だ」

ツエルノが跳躍した。

上から人差し指をおっさんに向け、術式を唱える。

『大地の剣!』

おっさんが居るところを中心に、地面が割れた。

おっさんはバランスを保ちながら、着地寸前のツエルノを指差す。

『植物家の指人形！』
リヴィア

木の葉がまるでカッターか何かのように、ツエルノめがけて宙を切り裂く。

着地したと同時に新たに術式を唱える。

『炎の逆十字！』

数十枚と飛んできた葉に火をつける。それは、灰となって地面に落ちた。

おっさんは地割れしていないところに跳躍し叫ぶ。

『風の風車！』

鋭い風が、一瞬だけ油断したツエルノ腕をかすめた。

「ツエルノ！！」

よほど助けようかと思ったが、手を出さないと約束したから、出すわけにもいかない。

「……っ」

肩の近くが切られている。が、それは服だけで、皮膚の方は平気なようだ。

そこで、ツエルノは何を思ったのか、腰にある長剣を抜いた。

気術と長剣だったら、気術の方がずっと有利なハズなのだが……。

「あー……時々いるんだよねー。気術より剣を好む人」

ルージスは何故か面白そうに言った。

「……そうなのか？」

「うん。まあ気持ちはわからなくもないんだけど。実在するものの方が安心出来ると言うか……」

気術だって実在しているハズなのだが……。

剣を扱うのがあまり得意ではないせいか、俺にはよくわからない。ツエルノは長剣を振り上げる。

「……っ！！」

おっさんとはっさに短剣を抜き、それを受け止める。

だがやはり、長剣の方が有利なのか、短剣が弾き飛んだ。

……どうやったのかは速すぎてわからなかったが。

更に、体勢を崩したおっさんの頬を、ツエルノは拳で思いっきり殴った。

「うわ……」

痛そう。もろにくらってたし。

「ふざけんな!!」

ツエルノらしくもなく、叫んだ。そしておっさんの上に馬乗り状態になり首を締める。

「ふざけんなよ貴様!! ツィアがどれだけ心配してたと思ってんだよ!! どれだけ迷惑かけたと思ってんだよ!! 神の石がそんなに大切か!? 俺達より大切なもんなのかよ!?!」

声が、震えていた。

ツィアが、と言っていたが、本当は、自分^{ツエルノ}が一番心配していたのかもしれない。

ここで、ルージスがぼそりと。

「あんなに近いんだから、さっさと気絶させちゃえばいいのに」

「……お前……」

確かに、『精神の門番』など、人間に直接関係ある気術は、ある程度その対象の近くにいかなければならない。『癒しの救済者』も例外ではないのだが。

「今はそれどころじゃないだろ……」

「でも、早くしないと、向こうが先にやっちゃうかもじゃん」

……確かに。

このルージスの言葉が聞こえていたのか、ツエルノはおっさんの首を締めたまま叫んだ。

『癒しの救済者!!』

おっさんはそのまま、意識を手放した――。

【第7話】少年の本音

「ツァイス様が……!？」

「ということは……ツァイス様のご子息のツェルノ様が長に……!？」

団員達がざわめく。それほど、衝撃的だったのかもしれない。

だが、ツェルノはしばらく動かなかった。肩で呼吸しているのがわかる。

その荒い呼吸を調べてから、ツェルノは立ち上がった。

「……聞けよ、お前等」

団員が姿勢を正す。

「今から俺がお前等の長だ。……だから、今から俺の命令に従え。いいな？逆らうつもりなら、今ここで自害してもらう」

異議はないらしい。どこからも声は上がらなかった。

「……逆らうつもりではないのなら、本日をもって、この聖騎士団は……」

少しためて。

「解散する」

団員の表情が曇った。辛うじて、声は出さないことが出来たらしい。

「……いい加減、気付けよ。この組織はこの世に必要なんだよ。

ラルティエシェインを使うコトしか考えてないんだろ？そんな危険な組織が居ちゃあマズいつてコトくらいわかるだろ？」

「ですが……」

「逆らうのか？」

反論しようとした兵に、ツェルノは静かに言った。瞳はひんやりと光り、兵を見ている。

「今は俺が団長だ。逆らえばどうなるかぐらい、わかるだろ？」

今のツェルノなら、そいつらを殺すだろう。兵達は、何も言う

事が出来なかった。

「もう二度と、ラルティエシェインラルティエを利用する事を考えるな。あの石は、貴様等の手には負えない。神の使いだけが所有することを許される。あの石は……俺達が使う事は許されないんだよ」

遠い昔、神がこの世に残した聖なる石。人間はそれから、その石のために争いを続けてきた。

それは許されないと知っていた、賢者でさえも。

「もう二度と、ラルティエシェインを使うことなんて考えるな。いいな？」

兵達は動かなかった。長の命令は絶対だと知っていても、躊躇いがあるのかもしれない。

ツエルノは小さくため息を吐き、俺の方を見てきた。

「リスタ」

おそらく、心の中を引っかかり回せということだろう。こいつ等だけどもどうにかしておけば、残りの兵達はこの等がどうにかしてくれるだろう。

人差し指を兵達に向ける。

『精神の門番』

銀色の月が輝いている。

夜が明ける気配は、まだ無い。

「2人とも、もう普通に眠ってるよ」

足音を殺してリビングに戻ってきたルージスが言った。

ツエルノの親父……ツァイスというらしい……を治療していたのだ。

「悪い、2人とも。手え出すなどか言っておいて……」

珍しく、力の無いツエルノの声だった。

「結局、最後まで2人に助けられっぱなしだったな……」

「いいよ、そんなこと。ぼく達に全く関係ないコトだったら、その場で逃げるもん」

それもどうかと思うが……。

「まあ、そうだな。確かにお前に関係あるコトだったけど、俺達にも関係あったからな。むしろ、少し手え出せて良かったよ」

さすがに、ツエルノ1人にやらせてたんじゃ、俺達の気もおさまらない。

「……ああ」

ツエルノは、これも珍しく、穏やかに笑った。

何か……こいつ、意外と笑った顔、綺麗だな。

「あ、ダメだよ、リスタ。ツエルノはぼくの恋人だから」

「いや、恋人ってなんだよ!? つーか何で今俺が考えてるコトが解ったんだ!？」

俺の突っ込みも空しく、ルージスはツエルノの金色の頭を撫でた。

「……よく頑張ったね。あれ、本音でしょ？」

「……………」

あれ、と言うのは、『癒しの救済者』を使う前に言っていた、あれだろう。

どれだけ心配かけたと思ってんだよ、とか、そんな感じのやつだ。

「あれ、ツイアちゃんの名前出してたけど、実は自分が思ってたコトでしょ? 本当は、ツエルノが一番心配してたんでしょ?」 ツエルノはしばらく黙っていたが、ゆっくり口を開いた。

「ツイアには……両親は死んだって言い聞かせてた。いや、母親の方は本当に病気で死んだんだけど……。で、ちょうどその頃、親父も聖騎士団とかいうのを作って、どっかへ行っちゃった。まあ、ツイアもまだ2歳だか3歳の頃だったし、覚えてないだろうと思ってたんだけど……」

「ツイアちゃんは覚えてたんだ」

俺なんか、10歳の時にいなくなった両親の顔もうっすらとしか覚えて無いって言うのに……。やっぱり、執着心みたいなモノが違

うのだろうか。

「これから……どうするの？」

小さく首を傾げて、ルージスは問うた。茶色の髪がさらりと流れる。

「さあな……。これだけやっても、神の石を探すとか言っつて、ツイアを残して出ていったりするようなら……その前に俺がこの手で殺してやる」

それだけの罪を犯したから。

そう言いたげだった。

「それにしても……」

ツエルノはふと、顔を上げた。

「お前等、何でそんなに追いかけてたんだ？ラルティエシェイン持ってたのか？」

冗談で言っているようにも聞こえたし、本気のようにも聞こえた。そうだ。俺達は、ラルティエシェインの秘密を知っていると思われていたのだ。

「持っていない。そんなもの俺が持ってたなら、すでにこの世から消えている」

俺は、そのために旅を始めたのだから。

「でもよお、それじゃあおかしくねえか？何でお前等みたいな一般人が、奴等に狙われてたんだ？」

「……それは……」

確かにおかしい。ラルティエシェインに繋がりのある人は、もつと他に居るハズだ。俺達なんかは、全く関係無いと言っても良いくらいなのに。

「ルージスが、秘密を握ってるとか、無いわけ？」

「……………」

ルージスの表情は変わらなかった。けれど、言葉を探しているようにも見えた。

「……どうしてぼくが？ラルティエシェインとは、全く関係ないの

に？」

俺の中で、何かが切れた。

今、こいつが、本当のことを言っているようには見えなかったから。

「……何でそうやって」

2人に聞こえるか聞こえないくらいの声量で言った。が、ちゃんと聞こえたらしい。こちらを見てきた。

「……そうやって、俺を騙そうとするんだよ。嘘ばっかつきやがって……」

「嘘なんて……」

「ついてんだろ！？ 見りゃあわかるよ！ 俺がそんなに信用出来ないのか！？」

自分勝手なコト言ってるのはわかってる。ルージスにだって言えないようなことはあるし、俺に言わなきゃいけないというコトもない。

だけど……。

「俺だけが……お前のコト信頼してて……馬鹿みたいじゃねえか！」

「違う！ ぼくだってリスタのコト……！」

「だったら！ 何で騙そうとしたりするんだよ！ 信じられなくなるだろ！？」

……最初から、こいつは謎の多い奴だった。

だけど、俺がいくら無茶しようとも、止めずに、ついてきてくれた。

俺のことを、一番理解してくれた。そして、俺もルージスのことを理解していると思っていた。

だけど、それは間違いだったのかもしれない。

「……結局、俺はお前のことを、何も解ってなかったんだな。解ったつもりでいただけなんだ」

「そんなこと……」

「うるせえ！」

ドアを開けて、店から飛び出した。

我儘だと知っていても、あいつの近くに居たいと、心底願っていたから。

それが、俺の本音だったから――。

【第8話】相棒の告白

「……っ」

しばらく、走っていた。目的地もなく、ただ、走った。
が、疲れたので足を止める。

「くそ……っ」

いつもなら、このくらいじゃ疲れたりなんてしないのに。

……精神的な問題か。

木々がざわめく。それが、俺を責めているように聞こえて。

……やっぱ、俺が謝んなきゃ……いけないよなあ……。

「でも……今更戻りにくい……」

あれだけ喚き散らかしたのに。

いやでも、ちゃんと謝らないと、とか考えていると、遠くから、
聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「リスター……」

……ルージスだな。

「リス……あ」

目が合った。と同時にルージスが来た道を戻ろうと方向転換した。

「待て！俺を探しに来たんじゃなかったのかよ！？」

「いや、そうだけど……」

もごもご何か言う。それから、意を決したように顔を上げて、
今度はハッキリと言った。

「ごめんね。リスタのコト、信頼してないわけじゃないんだよ……」
また俯く。

「あー……いいって。俺が悪かった。そんな無理しなくていいから
……」

「違うの！ぼくがリスタに言えなかったのは、リスタに迷惑かけた
くないと思って……。結局かけちゃったけど……」

本当にごめんね、と泣きそうな顔で言う。そんな顔で言われたら、

こっちまで泣きたくなってくる……。

ルージスは俺の上着をきゅっと掴んだ。

「ぼく、実はラルティアの生き残りなんだ」

さらっと、本当に何でもないとこのようにさらりと言った。

ラルティアの……何だって？

「親とか親族の人達は、襲撃事件の時にみんな死んじやったんだけど……ぼくだけ生き残ったんだ」

「……は？」

生き残り。

唯一神の石を所有することが許される、神の使い。ラルティア

その生き残りが……ルージス？

「じゃあ……ラルティアエシェインは、お前が持ってたのか？」

「うん。今はぼくの体内にある」

「たい……？」

さっきから、爆弾発言ばかりだ。そろそろ頭がついていけなくなってきたぞ。

体内つつーのは……体の中ってコトだよな？

「……何で体の中なんかに？」

「ぼくの父親が、ぼくを養父に預ける前に埋め込んだんだ。ラルティアエシェインが誰にも奪われないように。……多分、襲撃されることを予想してたんだと思う。案の定、ラルティアの一族はみんな死んじやったんだけど……ぼくだけ生き残った。ラルティアエシェインもここにある。けど……」

自分の胸の辺りに手を当てながら。

「体内のラルティアエシェインを取り出す方法が解らないんだ。それを記してある本も、襲撃事件の時に奪われたらしい。だからぼくは、その本を探してるんだ」

「……………」

「そしてその本が見つかって、ラルティアエシェインを取り出すコトができたら、ラルティアエシェインを消そうと思っていた。けど……」

…ラルティエシェインはぼくだけの力では消せない。そんな時、リスタに出会った。『衛^{つぎ}星の雫』が使える君に。だから……」

青い瞳を俺の方に向ける。

「偶然にも、ぼくとリスタの目的は一緒だったんだ」

ラルティエシェインを消すこと。それが、俺達の目的だった。

ずっと……同じモノを、探し求めていたんだ。

「今まで黙っててごめんね……」

ルージスは自分の額を、俺の肩にとん、と乗せた。……泣きそうな顔で。

「いや……こっちこそごめん……。そんな事情も知らないで色々……」

言いながら、頭の中で整理する。

ルージスはラルティアの生き残りであり、体内にラルティエシェインが埋め込まれている。そしてそれを取り出すために、本を探している。取り出したら、ラルティエシェインを……。

……いや、待てよ。ラルティエシェインは、“ぼくの力だけでは消せない”と言っていた。つまり……。

「ルージスの力も必要……なのか？」

ルージスの力だけでは消せない。ということは、俺の力だけでも消せないのだ。

「ラルティエシェインを消すには、二つの力が必要なんだ。一つは、リスタが使える『衛^{つぎ}星の雫』。もう一つは、ぼくの『神^{ラルティエシェイン}の石の排除』。……この二つなんだ」

つまり……俺1人では、例えラルティエシェインを見つけたとしても、何もできなかったんだ。ルージスと……ラルティアの生き残りとは出会わなければ……。

「だから……リスタに会えたコト、凄く感謝してる。……今では、『衛^{つぎ}星の雫』が使えるからってだけじゃなくて、ぼくのコト、信じてくれるから……だから本当に、嬉しくて仕方ない」

「……俺だって……」

こいつに出会えて、本当に良かったと思う。例え、俺のことを信頼してくれていなくても。

「ぼくの力が強いのは、ラルティエシェインが埋め込まれてるからなんだ。……そのラルティエシェインを取り出して、力が弱くなっても、相棒でいてくれる？」

「……………お前まさか、俺がお前と相棒でいるのは、お前の力が強いからだと思ってんのか？」

「違うの？」

……………やっぱり信頼されてなかった。予想はしていたが、面と向かって言われると寂しい。

「お前……馬鹿じゃねえの？ お前はお前だろ？」

ルージスは微かに笑った。

「うん……そだね……」

「お、仲直り出来たか？」

店に戻ると、ツエルノがいつもの笑顔で迎えてくれた。何事もなかったかのように。

「ああ」

今は、その笑顔が有り難かった。

「ツイアと……親父さんは、平気か？」

「あー、別に平気じゃね？ 様子見に行っただけだよ」

おい、行ってあげろよ。

「1回くらいは……」

「お兄ちゃん!？」

寝室に繋がる扉が、物凄い音で開いた。

顔を出したのは、金髪をおろしたツイア。

「ねえ、お父さんは!？ お父さんはもう、いっちゃったの!？」
目に涙を溜めながら、ツエルノの服を掴む。

ツイアも、心配、してたんだろうな。

「大丈夫だって。隣りの部屋で寝てる」

「ほんとに？」

「当たり前じゃねえか」

大きく、安堵のため息をついた。

「よかったあ……」

本当に、お父さんが大好きなんだな……。

まったく、こんな良い子をおいて、あのおっさんはドコほつつき歩いてたんだか。

「ねえ、これからはお父さんも、いっしょにいられるの？」

再び心配そうな顔でツエルノに問う。

「あー……多分な。俺がどうにかするし」

「やくそくだよ？どうにかしてね？」

「ああ。どうにかする」

ドコか別の部屋で、いきなりボタンという音がした。……相当でかかったな。

「何？」「親父が寝台から落ちた音かも。寝相悪いんだよねあ……」
ぶつぶつ呟きながら、音が聞こえた部屋へ行く。

入る前にしっかり、

「誰も入ってくんないよ？」

と、言い残して。

「……まあ、そりゃあそうだよな。久々だし。親子水入らずで話したいよね」

「だよな。あいつ、何だかんだ言って、父親のコト大好きみたいだしな」

「うん。でもね」

ルージスはにっこりと笑った。

「入るなって言われたら、入りたくなっちゃうよね？」

きたー……。こいつは何でこう、意地の悪い奴なんだ……。

「いや、それはマズいだろう。責めて、盗み聞きに……」

「よし、じゃあ盗み聞きしよっか」

……ということに話はまとまり、部屋の前まで行く。

そして息を潜めて、ドアに耳をつけた。

【第9話】長き夜の終わり

「気分はどうだ？」

ツエルノは予想外にも、普通のコトから切り出した。

俺達は一度目を合わせてから、会話に集中した。

「……悪くはないな」

「そっか。……ツイアが、心配してたぞ。お父さんはもう居ないの
かって」

「はは……そうか。驚いたな。まだツイアが俺のコトを覚えていた
なんて」

「俺もさ。もう何年も前のコトだしな……。覚えてないだろうと思
った」

「そうだなあ……」

「……………」

「……………」

しばし沈黙。中の様子はわからないが、もしかしてツエルノは、
緊張してたりするのかもしれない。

「……お前、さ……」

「お父さんと呼びなさい」

「誰が呼べるか馬鹿。……この家に残る気あんの？」

「……………」

「ないって言われても、正直困るんだけどさ」
意外と、優しい口調だった。

「……それは……」

「それは？」

「……それはー……」

「タメが長えよ。さっさと見え」

「今からでも、父さんのコトを、許してくれるのか……？」

「……………」

沈黙。……ツエルノは、どんな表情なのだろう。

「……ツイアは、許すだろ。なら、俺も許すさ」

これを聞いて、ルージスは首を傾げた。

「ツエルノは……シスコンなの？」

「いや……普通に妹思いなんだろう？」

良い兄貴ではないか。

その兄貴は、続けて言った。

「でもよお、さすがに、タダでは許せねえよな」

言い終わる前に、がつ、という鈍い音が聞こえてきた。

そしてガラスか何かが割れるような、ガシャンという音。

「だから、今のでちゃらだ」

「はは……お前も、強くなったなあ……」

「いいか、誓えよ。もう二度とツイアに心配させないと。またわけの解んねえ組織を立ち上げたりしないと」

「あの組織を馬鹿にするな。あれはこの世を守るための組織なんだ」

「いい加減、気付けつつってんだよ。あの組織のせいで、何人もの人を傷つけたじゃねえか。あいつら……リスタとルージスだって、被害者だろ？」

「それは、ある情報が流れてきたんだ」

「どんな？」

「……あの2人のどちらかが、ラルティエシェインを持っているという噂だ」

「……どこから」

「黒の……黒の十字集団だ」

「……………」

また、新しい団体名が出てきた。

黒の十字集団。

……この世界には、ラルティエシェインを狙う、裏の組織が数えきれないほど存在する。これも、その1つなのか。

「……じゃあ、そいつは間違いだったな。あいつらは、何も知らないらしいから」

ツエルノがどこまで知っているのか、よくわからない言葉だった。もしかしたら……全部、知っているのかもしれないが。

「もう二度と、あいつらに手えだすなよ。……ツィアだって、お前のコト、ずっと待ってたんだろうし」

ツエルノの足音が、近付いてきた。

……やべ、こっち来る！

「……大丈夫かお前ら」

「……え……？」

ソファアの上で息を切らしながら答える。咄嗟に全速力で戻ったから、さすがに疲れた。

「ど……どうだった……？親子水入らずの会話は……」

「まあ……何とか丸く収まったって感じだな」

後ろから、親父さんが顔をだし、俺達に向かって頭を下げた。

顔には、殴られたような跡が。

「あー……もう良いっすよ。二度とやらないって、誓ってくれたなら……」

「そうですよ。気にしないで下さい」

笑顔で、そう言うと、親父さんはもう一度、深く頭を下げた。

夜が、明けようとしていた……。

「もういっちゃうの？」

ツィアが俺の服を掴み、可愛らしく言ってきた。

朝飯も頂き、そろそろ行こうかなーと立ち上がった瞬間だった。

「ああ。いつまでも居るわけにはいかないしな」

「でも……」

「もうお父さんだって居るんだし、寂しくないだろ？」

「……………」 ツィアは小さく頷くと、その小さな手を離した。

「何か、俺も寂しいなあ。また来いよ？」

ツエルノがいつも通りの笑いで言った。

それに、自称恋人のルージスが答える。

「うん、また寄らせてもらうよ。ありがとうね」

「気にすんな」

最後に、親父さんが。

「……すまなかった」

また頭を下げてくる。……さっきも許すつつたのに。

「もう良いですから。それより……」

親父さんは顔を上げた。

「奴等……黒の十字集団？は、ドコにいるんですか？」

どうせなら、奴等と会って話をしたい。

情報を流した、張本人に。

「それは……俺もよくはわからない。ただ、人の目につくようなトコロには居ない。実際、俺も奴等に会ったのは、誰も来ないような森だった」

……当然か。そう簡単に見つかるハズもないよな。

「……探すのか？」

ツエルノが真顔で訊いてきた。

「何か……これで終わらせるわけにもいかないじゃん？」

「……そうだな」

また、いつも通りの笑みに戻る。……やっぱりこいつには、この笑みが一番似合うよな。

「じゃ……そろそろ行くよ」

「色々、ありがとうございました」

ルージスと一緒に頭を下げる。

「おう、気をつけろよ」

「またね！お兄ちゃんたち！」

手を振りながら、植物の店、ギニョールから出る。

「何か……また故郷が増えた感じ？」

「だな。また此処にも寄らせてもらうか……」

今度は、5人でゆっくり出来たら良いと思う。こんな忙しい夜じやなくて、もっと楽しく過ごせそうだ。

朝の青い空を見上げながら、俺達はまた旅を始めた――。

【第10話】迷子という悲劇

「……誰だよ。ここ、近道だって言ったの」

日が暮れて、だいぶ暗くなってきた森。

「雑貨屋のお姉さんでしょ」

俺達は、ほとんど迷子状態だった。

リヴィア家を出てから、俺達はふらふらと旅を続けた。

特に大した情報もなく、次の町を目指して歩いていた。

そこで、町を出る時、雑貨屋のお姉さんが。

「隣の町は、ちょっと遠いのよねえ。だから、あの森を横切って行くと、とっても近いわよ」

と言っていた。

黒の十字集団とかいうのも、人目のないところに居るらしいから、お姉さんの言う通り、そっちへ行っただが。

「なーにが近道だ！全っ然ここから出られないじゃねえか！」

「道……間違えたかなあ」

……そんなコトは無いハズだが。

道には見えないけど道っぽイトコロを歩きながら、愚痴を言い続ける。

……言っただってどうにもならないコトくらいわかってるけど。

「……今日は、完璧野宿だな」

「だね……。火、つける？だいぶ暗いし」

確かに、もう暗い。

「だ……ここで休むか……」

適当な大きさの枝を拾い集める。それを、少し広めの場所に置いた。

『炎の逆十字』

ルージスが術式を唱え、火を付けた。

とりあえず、その火の周りに腰を下ろした。

「野宿、久しぶりだね」

「だなあ。最近は泊めてもらってるからな……」

「夕飯は抜き？」

「一食くらい抜いても平気だろ。……それとも、何か捕りに行くか？」

「面倒くさい……」

リスタが捕りに行ってくれない？とでも言いたげな表情。……何故俺が！？

「……俺は行かないって」

「……あっそ」

そんなに落ち込まなくても……。何か俺が悪いコトしてるみたいじゃん。

「あ、良かったー。火があるよ！」

急に、見知らぬ女の声が入ってきた。

しかも、2人。

「本当！良かったわー」

良かったわーって……。これ、俺達がつけたやつなんだけど。

「あの、もしよろしかったら、座らせてもらって良いかしら」

「道に迷っちゃって……」

ルージスと目を合わせる。

「あ、あー、もちろん。困った時はお互いさまだ」

「ありがとう！」

不可解な点があるが、まあ仕方ない。断るのも不自然だし。女2人は、火の前に腰を下ろした。

「あたしは、エルシア・パークス。エリイでいいわ」
1人が言った。

エルシアと名乗った方は、金髪を高い位置で二つに結び、それを綺麗に巻いている。

服装は、ピンク系でリボンがあしらわれたもの。いわゆる、今時の格好だ。

「あ……私はパティエ・クロスティです。よろしくね」

こっちは黒髪ショートヘア。服装も青系で、やっぱりいかにも最近の子って感じだ。

年齢は、多分2人とも俺達と同じくらいだろう。

「あー……俺はリスタ・ローカス」

「ぼくはルージス・ライ・ステインです」

とりあえず自己紹介してみた。よろしくーとか言ってみたり。

「えっと……2人はどうしてここに？」

ルージスが言葉を選ぶようにして訊いた。……の、わりには、結構突っ込んだ質問だけど。

「あたし達、色んなトコロを歩いてみるのが好きなのよ。色んな町行ったり、こんな森に入ってみたり」

「でも、ごめんなさい。私達のそんな趣味のせいで、貴方達に迷惑かけちゃって……」 パティエの黒い頭がしゅんとなる。

本当に申し訳ないと思っているのかもしれない。

「あー、いいよ別に。気にするな」

俺の言葉を聞き、パティエはふわりと笑った。

「ありがとう」

おお……こうやって笑うと、目茶苦茶可愛いな。

「……リースター……戻って来てー」

「おっ、悪い……」

いや、だって本当に可愛かったから……なんて、思っている場合ではない。

「『炎の逆十字』は使えないのか？」

気術を使える俺達人間にとって火をつける手段は、木を擦りあわせて、とか、そんな原始的な方法だけではない。『炎の逆十字』で一発だ。

「使えないことはないわ。ただあたし達、『炎の逆十字』苦手なのよね。『水の盾』と『癒しの救済者』は得意なんだけど」

エルシアが答えた。……まあ、中にはそういう人も居るよな。

「ねえ、それより！夕飯はもう食べた？」

再びエルシア。……よく喋るコだなあ……。

「いや？食べてないけど……」

「ならちようど良かった！夕飯まではいかないけど、お菓子とかパンとか、沢山持つてるから、よかったら食べてよ。座らせてもらってるのに、何もしないんじゃないアレだしね」

言い終わる前に、エルシアは自分のカバンの中から食料を出した。ビスケットにパン等々……。そんなに多くはないが、貰えるだけありがたい。

「わあ！本当に良いの！？」

嬉しそうにルージス。

「もちろん。遠慮なくいっちゃって！」

「じゃあ、お言葉に甘えて……」

俺達はそれらの食料に手をのばした。

「ご馳走さまですー」

本当に遠慮なく頂き、食料はすぐに無くなってしまった。食べるのに夢中で、ほとんど会話なんてしなかったし。

「少しはお役に立って良かったわ」

「少しどころじゃねえよ。本当にありがとうございます」

深々と頭を下げる。やっぱり食事は大切なのだと、改めて思いました。

「……2人は、どうしてこんなトコロに？」

パティエが控えめに訊いてきた。

「えー……何か、雑貨屋のお姉さんに、ここ近道だからって言われて……」

「だけど、全然近道じゃなかったみたいで。それで、野宿するんだ」

……何か、思い出すだけで腹が立ってきたぞ。

「だいたい、わけがわからん。あのお姉さんが俺達を騙して、何かメリットがあるのか？それとも、単に間違えているのか……」

「大丈夫？リスタ……」

ルージスが顔を覗きこんできた。それで、はっと我にかえる。

「お、おお。大丈夫だ……」

だが、こんなのは

序の口でしかなかったのだ――。

【第11話】意外な特技

「へー、それじゃあ2人は、親友ってコト!？」

目を輝かせてエルシア。俺達のコトを色々話している時だった。

「いや……親友ではないんじゃないかね？」

「うん……ちょっと違う気がする」

そもそも親友って、そんなに軽いもんじゃないんじゃないかねえの……？

「そうなのー？あたし等は親友よ。ね、パティエっ！」

「もちろん!」

「……………」

呆れて言葉が出ない。そうやって言葉で確認しあった“親友”ほど、怪しい親友はいない。

おそらく、ルージスも同じコトを思っているのだろう。

確かに、親友とは少し違うけど、相棒だって似たようなものだ。

そう簡単に言葉にするようなものではない。

……いや、たまに言っちゃったりするけど。

隣りで、ルージスはぼそりと呟いた。

「その“親友ごっこ”も、いつまで続くかね……」

「おい、聞こえるぞ……」

幸い、聞こえていなかったようだ。

「ほら、見て。これもお揃いな」

そう言って、首にかけてあるネックレスを見せてきた。真っ黒

な十字架のものだ。

「へえ……」

「あ、何ー？その疑うような目は」

エルシアは酔っ払ったようにケタケタ笑った。それに比べ、パティエの笑い方は上品だなあ……。

……それにしても、黒の十字架か……。

「やっぱり、こんなトコロに居ても会えないみたいだね」

ルージスが小声で言った。おそらく、十字集団のコトだろう。

「だな……。明日にはここから出て、また情報収集しなきゃいけないよな……」

ラルティエシェインを狙う集団。そしてそのラルティエシェインは、ルージスが持っている。

だから、俺達は待つだけではなく、こちらからも攻めていかなければならない。

「食後に、珈琲なんていかが？」

突然、パティエが訊いてきた。

「……珈琲？」

「ええ。そんなに良いやつではないけれど……。要らないかしら……」

上目遣い気味に言う。……それ、反則じゃね！？

「要る。頂きます」

パティエの顔が明るくなった。

「ちょっと待ってて。すぐいれるわ」

嬉しそうに、硝子で出来たコップに珈琲を入れる。……何でそんな物を持ってるんだとか、訊いちゃいけない雰囲気だよな……。

「どうぞ」

俺とルージスの前に、コップを置いた。

珈琲の良い香りがする。

「……………」

だが……俺の勘がコレを飲むことを許さない。

普通の人だったら、気のせいだと言い聞かせて飲むだろうが、俺の場合、そうはいかない。

「わあ、美味しそうー。いただきます」

ルージスがカップを口に持っていく。

「……ルージス、待った」

ギリギリのところで手を止める。

「……何？」

「それ、飲むなよ」

俺はルージスのカップを取り上げ、臭いを嗅いでみる。もちろん、珈琲の香りしかないのだが……。

「……違うな」

「だから何が」

「俺のとは違う」

「はあ？」

素頓狂な声を出すルージス。エルシアとパティエは驚いたようにこちらを見ている。

「……何よ。パティエが入れた珈琲に、変なものでも入ってた？」

「変どころじゃないだろう」

俺はカップを2人に見せるようにして言った。

「ルージスの珈琲に、睡眠薬とか、そこらへんの薬をいれただろう。しかも俺の方には致死量の毒を入れたな？」

2人はしばらく黙っていた。

驚いているような、こちらを睨んでいるような、複雑な表情で。

「何言ってるの？何も入ってないわ。ただの珈琲なんだけど？」

急に笑顔に戻りエルシア。続いてパティエも。

「そうよ。私は何も入れてないわ。しかも致死量って……」

「そうなんだよ」

俺はもう一度カップを見つめて言った。

「俺の方は、飲んだら絶対死んでた。でもルージスの方は死ぬまではいかないだろう。……この差はなんだ？もしかして、俺を殺して、ルージスを手込めにするつもりだったか？」

「うわあ、最悪。ばく、君達みたいな娘には興味ないよ」

そんなコトあっさり言うお前が最悪だ。

2人が明らかに表情を変えた。俺達を睨んでいる。

「……どうしてわかったの？」

「そうよ。両方とも無味無臭なのに……」

俺は2つのカップを、エルシアとパティエの前に置いた。

「ある意味、俺の特技だ。昔、毒味の仕事しててさ……。毒味する前に気付けば、俺が死ぬコトもないだろう？」

ルージスが驚いたように目を見開いた。

「初めて聞いた、そんな話。てか毒味の仕事ってどんな仕事なのさ」

「そのまんまだって。毒味するんだよ。で、毒味して死んだらあんまりだろ？だから、自然と勘でわかるようになったんだよ」

「……すごいね」

自分の身を守るためには必要だったのだ。……まさかこんなトロでも役に立つなんて、思ってもみなかったが。

「……で？お前らの目的はなんだ？まさか本当にルージスをどうにかするつもりだったんじゃない？」

「馬鹿なコト言わないでよ」

「そうよ。私だって貴方みたいな人には興味ないわ。私、もっと背の高い人が好みなの」

いや、パティエ、そーゆーコトじゃないだろ。

「だったら何なんだよ。おかしいだろ」

「そうだよ。ぼく的には睡眠薬で良かったと思うけど」

「……俺は下手したら死んでたんだぞ」

時々、ルージスはどこまで本気なのかわからなくなるな……。

「……本当に、想定外だったわ。貴方さえいなければ、計画は成功していたのに……」

「だからなんなんだって」

エルシアはすうっと目を細め、静かに言った。

「ルージスの体に埋め込まれているラルティエシェインを奪うためよ」

「……………」

今日は恐ろしいくらい、音の無い夜だった――。

【第12話】黒の団員

「ふーん。それで？」

ルージスは特に何でもないことのように言った。

「だから、あたし達がちょっと手荒に奪いとる前に、自分で出して
って言ってるの」

ぽりぽりと頭をかく。

「そんなこと言われてもなあ……」

「ああもうっ！焦れたいわねーっ！」

あっと思った時には遅かった。俺としたことが、パティエにナイフを突き付けられ、身動きがとれなくなってしまった。

「ちよっ……」

「さっさと出なさい！さもないと、あんたの親友を切り刻むわよ」

「親友じゃないっていつてるんだけどなあ……」

そう言うのと、ルージスは立ち上がり、歩きだした。

「どうぞ、好きなように」

「おいしい！ちよっと待てええ！」

ルージスが振り返る。

「何？」

「何じゃねえよ！何俺残して逃げようとしてんの！？しかもお好きなようにってなんだよ！」

「言葉の通りだよ。ぼく、こんな所で死ぬのやだし」

「元はといえばお前が原因だろおお！？」

極端な話、俺には関係ないのに！

さすがに、2人はたじろいだ。

「お好きなようにって……」

「あんた、本当に親友なの？」

「だから、親友ではないつつってんじゃない？」

「相棒だっけ？……本当に相棒なの？」

「俺にもわからん……」

物凄く寂しい気がするの、俺だけだろうか。

「……それより、ぼくはどうしたら良いのかな？」

まるで他人事のように面倒そうに言った。……自分の事だっ
てわかってるのか？

「だから、あんたがさっさとラルティエシェイン出してくれば、
それで良いのよ！」

「だから、出し方がわからないんだってばー」

「そんな言い訳が通用すると思ってるの!？」

エルシアが動いた。

首に掴みかかり、地面に叩き付ける。

「ルージス！」

「ぐ……っ」

空いている左手をルージスの胸にかざし、エルシアは叫んだ。

ラルティエ
『管理者の解放!』

あたりが静まり返った。

火が、ぱちぱちと言っているだけだ。

「……なんで……？」

何も、起こらなかった。

こんな術式は初めて聞いたが、きっと、何か起こるハズのものだ
っただろう。

エルシアとパティエが啞然としている。

「嘘よ……なんで……？」

「この術式が正しいんじゃないの!？」

やっと解放されたルージスは、咳込みながら答えた。

「ぼく……一言も正しいなんて言っていないじゃん……。ぼくの方が
訊きたいよ。それがラルティエシェインをとるための術式なの？」

「違うの!？」

エルシアとパティエが同時に叫んだ。

それを聞いたルージスが呆れたようにため息を吐く。もはや俺に

はついていけない。

「こっちが訊いてるんだよ……。そんな術式初めて聞いたし」

「だって団長様がおっしゃってたわ！この術式だって……！」

「……誰だって？」

エルシアは、はっとして口を押さえる。何か言っではいけないことを言ってしまったらしい。

もう一度、ルージスが問うた。

「誰が、この術式だと言ったの？」

「……それは……」

黙り込んでしまった。

更にルージスが。

「じゃあ質問を変えるね。団長様って、誰？」

鋭く言われて、エルシアは渋々口を開いた。

「……あたし達の、トップに立つ人よ」

「その君達の所属している組織はもしかして」
間を置いて。

「黒の十字集団？」

2人の顔色が変わるのがわかった。

とても長い時間、沈黙した。それから、きつとルージスを睨み付ける。

「そうよ！あたし達は黒の十字集団の団員。だから貴方のラルティエシエインは、何としてでも手に入れてみせるわ！」

エルシアは人差し指をルージスに向けた。

『闇の風神！』

黒い靄のような物が現れた。それはルージスに向かっていく。

『管理者の破壊神』

靄が分散した。

……どちらも聞いたことのない術式だ。特定の人にしか使えないやつだろうか。

そんな事を考えている間に、ルージスの後ろに、短剣を握ったパ

ティエが立っていた。

そのままルージスに襲いかかる。

「わっ！」

『精神の門番！』

間一髪のところでパティエの動きをとめる。その間に短剣を奪いとった。

「リスタ！そっちは任せた！」

「仕方ねーから任されてやるよ！」

とは言え、もうすでにパティエの意識はほとんどない。もう一度『精神の門番』で正常に戻せば別だが、特にやることはない。

『闇の雷神！』

またエルシアが聞いたことのない術式を唱えた。

小さな雷が落ちる。

「うわっ！」

何か俺も巻き添えをくらいそうになったので、急いで避ける。ルージスも少し、慌てているようだった。

「ちよっと待ってよ！これ反則！」

「こんなのに反則も何もないでしょ！？」

ごもつともで……。

避けながら、ルージスが術式を唱える。

『風の風車！』

強い風がエルシアに襲いかかる。

その風をもろにくらい、後ろの木に叩き付けられた。

「……っ！」

声にならない悲鳴をあげ、ぐったりとした。雷もやんでいる。

「ったく……しぶといんだから……」

ため息を吐いて、ルージスはエルシアの近くまで歩き、目の前にしゃがみこんだ。

「なん……なんなのよ……っ！あんた……結局何者なわけ……っ！？」

「ぼくはルージス・ライ・ステイン。……あるいはラルティア。で、リスタの相棒だよ」

幼い子供に言い聞かせるように、優しく、ゆっくりと言った。
睨まれても動じる事はない。

「なんで……あたしが負けたのよ……！ 闇が神に負けるって言うの……！？」

「闇なんて、簡単に口にしちゃいけないよ」
真っ直ぐエルシアを見つめる。

「闇は、光と対になる者。本当の光を人間が作れないように、闇も作ることができない。それを……君達が使う気術にあてはめちゃいけない。闇は、人間には操れないよ」

「じゃあ何！？ 団長様がおっしゃっていたことは嘘だと言うの！？」

「それは、君が決めれば良い」

エルシアは、はっと顔を上げた。

「正しいのか間違っているのかは、自分で決めれば良い。自分で、どちらを信じるのか、決めれば良いよ」

目を見張るエルシア。それを見つめるルージス。

長い沈黙の末、エルシアが口を開く。

「ル……」

「ん？」

「ルージス様……っ！」

「……はい？」

ルージスがたじろいだ。あまりにもエルシアの瞳が輝いているからだろう。

「あたし……こんな事言われたの初めてです。ラルティエシェインを狙う別の集団の人達には、闇はないとか存在するとか、どっちかしか言われなかったから……。だから、あたし、貴方を……ルージスを信じたいと思います！」

「はあ！？」

どこでどう転んだらそうなるんだ、とでも言いたげな表情で叫ん

だ。

「ちょっ……何か変じゃない!？」

「変ではありません! あたしは、ルージス様を信じたいのです!」

「だからそれが変だって……!」

珍しくルージスが困っているの、こそつとアドバイスしてみた。

「何か理由はよくわかんないけど、お前の事信じてるみたいだから、今のうちに聞きたいこと聞いちゃえば?」

「あ、そっか」

ルージスはわざとらしく咳払いをして、エルシアに問うた。

「……何で、ぼくの事信じてるの?」

「違うだろ! そっちじゃなくて!」

組織の方を訊くんじゃなかったのか。

「ですから、先程も申し上げました。自分自身で決めろとおっしゃったのは、貴方だけで……」

「エルシアも真面目に答えなくていいって」

きろりと、ルージスを睨む。さっさと訊け、という意味だ。

「えっとー、その……組織について、詳しく教えてくれる? なんてぼくの事を知っていたのかとか……」

「……はい」

エルシアは少し俯き気味に、口を開いた――。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5675c/>

神の使い

2010年12月25日14時34分発行